

2:

「はあ……はあ……」

ロビンの膣内で再び肉棒を肥大化させながら、男はロビンの胸にたわわに実っている二つの果実に視線をやっていた。

「……ごくっ」

膣内の肉棒が再び肥大化していくことに下腹部を熱くさせ、幸福感を感じながら笑みを浮かべるロビン。

そしてそんなロビンにももちろん、男の視線はバレバレであった。

「ふふっ♡♡ おっぱいがそんなに気になるのかしら？」

「はい……しゃぶってもいいですか？」

「あら、大胆ね♡♡ 触るのではなく、いきなりしゃぶるだなんて……ふふっ♡ いいわよ、いらっしゃい♡」

ロビンはベットにハナハナの実で腕を何本も咲かせると、男の身体を持ち上げ互いの体勢を変えさせる。

男とロビンは対面座位の形になり、丁度男の目の前にロビンのデカ乳があり、興奮たまらぬ男は勢いよく顔を谷間に突っ込んだ。

「んん〜!!! んばっ!!! んんっ!!!」

「んんっ♡♡ ふふっ♡♡」

ロビンの谷間に顔を埋めてズリズリする。

ムニムニとした乳肉の感触が肌に吸い付く様に心地よく、程よい反発を受けて押し戻されてしまう。

セックスにより谷間に程よく汗を掻いており、蒸れた乳房を癒すように男は舌を這わせて水滴を舐めだした。

「はあ! はあ! れ〜ろっ……れろっ……れ〜ろっ」

大きい乳房の間の底が見えない谷底に向かって舌を伸ばし、ついでに横乳の汗も拭い取っていく。

大人のフェロモンがたっぷり詰まった胸の間に顔を突っ込み、濃い女性の甘い匂いが鼻の中に入り脳を痺れさせる。

今まで触れたことのない柔らかな肌肉の感触が顔から伝わってきて、幸福感がどんどん増していき、膣内に入ったままの肉棒にも力が湧いてくる。

「んんっ♡♡ んあっ♡♡ おっぱい舐めて、元気になってるようね♡」

膣内で肥大化していく肉棒に愉悦の笑みを浮かべながら、腰をくねらせるロビン。

「れろっ!!! れろっんっ!!! んあっ……れろっ!!!」

ロビンのグラインド腰振りを受けたりして段々と興奮が増してきた男は、服に収まっている下乳部分も舐めようと舌を突き入れた。

窮屈そうに収まっている乳肉と胴体に舌が挟まれ、明らかに蒸れた空気が口の中に広がっていく。

「んんっ♡♡ ああっ♡ そんなとこまで舐めちゃうのね♡」

他人の侵入を許したことがない下乳部分に男の舌が這って、自分の身体から出たエキスを摂取していくことに異様な厭らしさのある熱さを感じるロビン。

「れろっ！ れろんっ……ぶあっ……ロビンさんの乳汗……凄く美味しいです……れろっ……れろっ……」

ロビンの汗は少ししょっぱさを感じつつも、自然と喉奥に進んでいき、何より性的な味が濃いため、脳を刺激し男の舌を執拗に這わせていた。

そして男は窮屈な服と乳房の間を舌で乳肉の形を変形させながら、無理矢理上の方に付き進めていく。

クリッ……

「あんっ♡」

すると男の舌先が遂に禁断の果実に触れてしまい、ロビンが敏感に反応した。

「んふっ♡ おっぱい汗いっぱい舐めてくれてありがとう♡ じゃあ次は、メインディッシュを出してあげるわ……」

そう言うとロビンは両手で服の胸の部分を掴み……

ボヨンッ！！！！

効果音がなりそうなほど、勢いよくデカ乳を曝け出した。

「……っ」

目の前に弾けだされた魅惑の爆乳を目を見開いて見つめる男。

綺麗に整っているが、どこか大人の色気を感じさせる形をした乳房の真ん中に、穢れを知らない綺麗なピンク色の乳首が突っていた。

「さあ、たと召し上がれ♡」

そういわれた瞬間、男はタガが外れた様にロビンの胸に襲い掛かった。

「んじゅるっ！！ じゅるっ！！ んあっ！！ あんむっ！！ ぢゅるっ！！ ぢゅるっ！！！」

胸を両手で乱暴に揉みくちやにしながら乳首に力強く吸い付く。

ロビンの乳房を揉めば指が深く沈んでいき、自分の力でぐによぐによと厭らしく形を変える様に男は興奮した。

そして口の中で転がせば転がすほどにコリコリと硬くなっていく乳首。

「いいわ♡ もっと！ もっと乳首コリコリして頂戴♡♡」

男が舌先で乳首を転がすと敏感なニップルから快感が伝わってきて、興奮が増したロビンは膣内の刺激も欲し、さらに勢いよく腰をグラインドさせる。

クチュッ！！ クチュッ！！ クチュッ！！ クチュッ！！

ロビンの腰の動きに合わせて、男も腰を突き上げる動きをし、互いの秘部を刺激しあった。

「じゅるっ！！　ちゅうっ！！　んぐっ！！　んんっ！！！」

「んあっ♡　あああああっ♡♡」

男が胸に吸い付きながら乳首に甘噛みすると、ロビンが強く反応し、膣壁の締め付けが強くなった。

そのロビンの膣内の締め付けが、ロビンの快感の反応だと分かった男は、少し強めに乳首を攻め始める。

男は乳首を甘噛みしている力を強めつつ、胸を揉んでいる両手の力も強め、より乱暴に揉みくちやにしまった。

乳首に歯形が付くくらいの強烈な噛みつきと、乳肉には暴力的な驚掴みの荒々しさがロビンの身体を刺激し、脳に快感を直撃させる。

「くあああっ♡♡♡　はあっ♡♡♡　あああっ♡♡♡」

（なんてこと！！　胸が……痛いはずなのに！！！！　こんなに……気持ち良く……っ♡♡♡♡）

自分の身体の快感に付いていけず混乱しながらも、さらに快感を得たいという本能が働き、ロビンは両手でがっとりと男を抱きしめると、腰の動きをさらに強め、自身の膣内を肉棒でかき回した。

「あゝ　あっ♡♡♡　ああっ♡♡　はあっ♡♡　あああっ♡♡♡」

肥大化した肉棒はカリ首とバキバキに浮き上がった血管が膣壁を引っ搔けて内側を抉る様な刺激を与え、その状態でかき混ぜられる膣内は喜びの愛液を垂らしながら肉棒に吸い付いていた。

膣内の吸い付きもさることながら肉棒の肥大化により、強烈な圧迫感で内側から肉壁を捲れあがらせるような強烈な攻めに意識を持っていかれそうになるロビン。

「んっ！　ぷあっ……ん　んっ！！　ん　っ！！」

さらには男が乳首から口を離れたかと思えば、両手で両乳の乳輪を強く摘まみつつ、その刺激でピン勃ちした両乳首に噛みついた。

「あっ♡　あゝ　あゝ　あゝ　あああああっ♡♡♡」

男を強く抱きしめ身体と頭を逸らせながら天井を向きつつ舌を伸ばして快感を感じるロビン。

男もロビンの乳肉のきめ細やかな質感と柔らかさや、その乳を強めに刺激することによって膣肉が異常な締め付けをしてくることで興奮し、腰を滅茶苦茶に動かして肉棒で膣内の快感を貪る。

クチュンッ！！　クチュンッ！！　クチュンッ！！　クチュンッ！！

激しくうねり合う二人の秘部から淫音が漏れ、室内に響き渡り、セックスしている事実を突きつけてくる。

男はさらに噛みついた乳首の先を口の中で舌を使って素早く舐め始めた。

快感で勃起した乳首を舌の上でこりゅこりゅと弄ぶと、自然と睾丸から精子が放りあがってくる。

童貞男に対して強気に出てきたロビンの身体を自分の良いように弄んでいる感じが、最高に男の下っ腹を熱くさせて、興奮を高めさせる。

ロビンも胸の痛み、特に乳首からくる痛みが脳を刺激し、それが快感となっていくことにすっかり興奮し、腰を激しく動かしていた。

「ああっ！！ はあっ！！ あああんっ♡♡♡ はあああっ♡♡♡」

(乳首が……弄ばれてるというのに……気持ち良い♡♡♡ それにこのチンポ……カリ首が大きくなって……膣内に引っかかって……膣壁が、持っていかれてしまう♡♡♡)

男の肉棒のカリ首が肥大化し、膣内を抉る快感を腰を振りながら貪るロビン。

その様子は瞳から涙を出し、口から涎を垂れ流そうとお構いなしに善がり狂い、男を強く抱きしめて、普段のクールでミステリあるなイメージが吹っ飛び、チンポに媚びる淫乱娼婦にしか見えなかった。

とても先ほどまで処女だったとは思えないグランド腰振りをしながら肉棒で自身の膣内をかき回し、ロビンは絶頂に至ろうとする。

膣内で肉棒が射精寸前だったことを察知し、より強く男を求めた。

「くあああっ！！ いいわ！！ そのまま射精して頂戴♡♡♡ 乳首虐めながら！！ 膣内にいっぱい精子射精して頂戴♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

「ん ん ん っ~~~~~!!!!!!」

「ああああああああああああああああ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

ロビンに射精を促され男がさらに強く乳首を噛むと、ロビンは天井を向いて反り返り善がり狂った。

男の歯の感覚と舌で乳首を舐められる感覚が脳に直に響き渡り絶頂へと導く。

そして興奮した男もがむしゃらに腰を突き上げて、膣内射精した。

ドッピュウウウウ！！ ビュルッ！！ ビュルッ！！ ビュルルッ！！ ビュルッ！！ ビュルッ！！

「あああああああああああああああああああ♡♡♡♡ ああっ……あああああ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡ はあああ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

ギシッ！！ ギシッ！！ ギシギシッ！！

長身のロビンの激しい絶頂痙攣でベットが壊れそうなくらい軋み音を慣らす。

「ああっ……はあ……はあ……」

射精による虚脱感で男が乳首から口を離す。

すると、乳首から痛みからの解放感による安堵感が快感へと変わり、ロビンは再び絶頂した。

「あっ！！ あはっ♡♡ ああっ♡♡♡ あっ♡♡ はあっ♡♡♡」

男の目の前で歯形マーキングのついた乳首がプルプルと絶頂痙攣により震えだす。

その乳首の様子が寂しそうに見えたので、男は優しく胸にかぶりつき、乳首をねっとりと舐め始めた。

「はあ……はあっ♡♡♡ んっ♡ はあ♡♡ はあ♡♡ ふふっ♡ 寂しがってた乳首に構ってくれてるのね♡ ありがとう♡」

男の後頭部を撫でながら乳首を舐めていることを褒めるロビン。

まったりとした絶頂余韻を楽しむことに互いに幸福感を感じながら強く抱き寄せ合う。

「くちゅ……れろっ……くちゅ……れろっ……ロビンさん……実は……まだまだロビンさんの身体を満足させる方法がいろいろあるんですけど…れろっ……くちゅ……」

「あら、なにかしら？　今の乳首攻めも、相当刺激的だったと思うのだけれど……」

乳首を舐めている男の発言に首を傾げるロビン。

先ほどの乳首噛み絶頂が凄まじい気持ち良さを感じたため、中々これ以上のことを想像できなかったロビンだが……

……………

……………

……

「……ゴクッ……それじゃあ、行きますね」

「ええ、一体どうやって楽しませてくれるのかしら？」

ロビンは今四つん這いの体勢でバックの状態に男にチンポを挿入されており、先ほどのプレイよりも凄いことをしてくれるとの申し出に若干胸を高鳴らせ、尻をフリフリしながら期待していた。

すると、男が緊張の面持ちで右手の人差し指を突き上げる。

「あら、指で私のアナルを穿るのかしら？　それだけでは新しい刺激とは言えないのだけれど……」

男が何をしようとしているのか察したロビンがそう告げるが、男の緊張した面持ちを見て見ると、どうやらそうではないらしい……

期待あり不安ありのフワフワした状態にいるロビンだが、その長身の女体は繋がった秘部から男が何をするのか察知しており、下腹部の興奮をぐつぐつと煮えさせていた。

「行きます……『PenisFinger（ペニスフィンガー）』！！」

男が唱えた瞬間、男の人差し指がうねうねと変形し、今ロビンの膣内に入っている肉棒と同じ、いきり立ったペニスの形に変形した。

「っ！？　あなた……それは……」

「このペニスフィンガーがあればロビンさんの穴という穴を同時に満足させることが可能です。安心してください、ちゃんと射精もできますし、股間にあるチンポと同じようにこちらでも気持ち良くなります」

ペニスフィンガーのペニス男の股間に付いているものと同じように、チンチンの実の形状変化もすることが出来、なおかつ感覚も同じなため、男はロビンの膣内を感じながらアナルの締め付けも感じ取ることが出来る。

「だけどまだうまく使いこなせていませんし、ロビンさんの膣内とケツ穴の気持ち良さを同時に喰らうので、少し早く射精してしまうかもしれません。だけど任せてください！！　何発でも、どこにでも同時に射精して見せます！！」

「凄いわね……あなたの身体……」

緊張のような期待のような汗を額にかきながら、ロビンはまじまじと指チンポを見ていた。

指チンポは完全にチンポという形ではなく、どこか指の形も残した形状をしており、手のひら側が裏筋になっていて鈴口からは既にカウパーが漏れてきて肉棒自体をギラギラにしている。

（なんというか……珍妙ね……）

指が腫れたというより、肉棒としての太さになり、我慢汁を垂らしている人差し指チンポを見て、ロビンのアナルが反応し、物欲しそうにヒク付きだした。

男の方もこれから自分の二本のチンポがロビンの膣とアナルを同時に刺激させることが出来る喜びに高鳴り、膣内の肉棒をより強固にさせていく。

「んっ♡ んふっ♡」

これから始まる行為に興奮している男のチンポの膣内での反応に、ロビンも艶やかな笑顔を見せる。

そして男がロビンの尻の割れ目を開いて、排出しかしたことの無い禁断の穴に指チンポをゆっくりと近づけていった。

「見せてもらわ♡ あなたの本当の実力♡」

ロビンも少し尻を振りながら男を興奮の頂へと導いていく。

「ごくっ……はい……」

クニュッ……

既に繋がった膣口の上に位置している肛門に指チンポを当てがった。

指チンポの先からアナルが興奮で蠢いたことがよく分かる。

「んっ……ふう……ふう……」

ロビンも禁断の排出口に異物が侵入してくることに對して緊張しており、息を整えている。

先ほどまでのロビンであれば男との性行為に対してさえ嫌悪感を抱いていたはずなのだが、既に脳がチンポ化しているため、今は肛門にチンポを入れることにさえ期待間で胸を膨らませている。

そんなロビンのヒク付くアナルに男の指チンポがゆっくりと挿入されていく。

クニュ……

「んっ……んんっ……」

肉棒に期待していたとは言えロビンのアナルの入り口はかなりきつく締められており、それなりに力を込めないと簡単に押し戻されてしまう。

「んっ……んふっ♡ どうしたの？ その程度のチンポ力では私のケツ穴を貫くことはできないわよ♡」

中々アナル内に入ってこないチンポを焦らすようにロビンが不敵な笑みを浮かべて男を挑発する。

男としてはロビンの身体を労わってゆっくりとアナルにチンポを馴染ませようとしていたのだが、挑発されてはそれに乗るしかない。

「ふう……ふう……分かりました。全力でイかせていただきます！！」

指先に力を込めた男は渾身の勢いで指チンポをロビンのケツ穴にブチ込んだ。

ズリュッ！！！！

「ん あゝっ！？！？！？！？！？！？！？！？」

男が指チンポをねじ込んだ瞬間、ロビンの直腸が圧迫され、女考古学者は悶え声を発してしまう。

(これは……膣内と……直腸が……同時に圧迫されて……っ♡♡♡♡)

膣内を圧迫している股間の肉棒はごもっとも、アナルに挿入された指チンポも直腸を圧迫しているため、二つの穴が同時に膨張し、下半身に強烈な異物感を感じまくっているロビン。

膣内と直腸の間の肉壁が二本の肉棒で挟まれ、グニユグニユと逃げ場のない刺激をダイレクトに受けてしまっていた。

「あゝっ……ああ……あっ……はあっ♡♡♡」

(今……軽くいったわね……彼のチンポが一本でも膣内に入ってるだけで幸せなのに……これで……動かれたら……)

口をだらしなく開けて涎を垂らした善がり顔で、何とか息も絶え絶えに意識を保ち絶頂痙攣しているロビン。

先ほどまでの余裕はどこへやら、二穴同時攻めに既に意識を持っていかれそうなほど快感を得ていた。

ロビンの絶頂により膣内とアナル内が引き締まり、男のチンポを締め付けて窮屈に刺激していく。

「くっ！！ ロビンさん……今……イきましたね……膣壁と直腸が、キュウキュウ締め付けてきますよ」

男も二穴による刺激を二本のチンポで同時に受け止め、今にも射精しそうな快感を我慢して歯を食いしばっている。

だが男も自身がそこまで射精を長く我慢することが出来ないと思い、腰を動かし始めた。

「イキますよ……ロビンさん……くっ！！」

男はいきなり激しくピストン運動を開始する。

ブチュッ！！ グチュッ！！ グチュッ！！ ブチュッ！！

二本のチンポが同時にロビンの膣と直腸に出し入れされる。

既に膣内と直腸は愛液とケツ汁を出しまくっていたため、我慢汁と混ざり合い潤滑油で滑りやすくなっており、スムーズにチンポを出し入れすることが出来た。

「おほっ！！ ほおっ♡♡♡ ほっ♡♡ ほっ♡♡ ほおおっ♡♡」

極太で血管バキバキのダブルチンポが同時に膣内と直腸を刺激し、とてつもない快感がロビンの脳を刺激して、普段では出さないアヘ声を出させてしまう。

膣壁と直腸は肉棒が引き抜かれる際に、どちらとも捲れあがるくらい肉棒に絡みついており、その卑猥な様子が男の興奮をさらに高める。

パチンッ！！！！

「はあああっ♡♡♡」

興奮した男がさらに左手でロビンのデカ尻を叩くと、膣内と直腸が同時にキュッと引き締めチンポを締め付ける。

そして射精間近な男にも力が入って指チンポの第一関節部分を曲げてしまい、ロビンの直腸の力強く挟る形になってしまう。

膣内からは反り返った股間の肉棒が直腸に向かって膣壁を挟み、直腸からは指チンポが膣壁へ向かって挟り返していた。

「ん`ん`ん`ん`っ！！！！！！`ん`ん`っ！！`ん`ん`ん`ん`っ♡♡♡♡♡」

膣と直腸の間の肉壁をチンポが挟り合っている感触が脳に響き渡り、もはや言葉にできないくらいの快感を得ているロビン。

見事な曲線美とグラマラスな身体を震えさせ、男の歯型マーキングが乳首に付いているデカ乳を揺らしまくり、膣とケツ穴両方を挟られている。

クールでミステリアスな女考古学者を自分のチンポで善がらせていることと、バックから見える素晴らしい光景に男の興奮も頂へと達していた。

「くうううううう〜〜〜射精ますよロビンさん！！`子宮とアナルに思いっきりブチまけます！！一緒にイキましょう！！！！」

ブチュンッ！！`グチュンッ！！`グチュンッ！！`ブチュンッ！！

男が射精しようとラストスパートの力強いピストン運動を繰り返すと、ロビンの秘部から下品な音がより大きく漏れ出した。

ロビンも男の射精を二穴からしっかりと感じ取っており、より女体をよじらせる。

（ダメっ！！！！`身体が欲しがってるっ！！`彼の精子を欲しがって！！`彼の絶頂射精をアナルと子宮に思いっきり浴びて！！！！`絶頂したい！！！！）

激しい刺激に精子の摂取と同時に絶頂したくなったロビンは、そのことを男に告げる。

「ん`ん`ん`ん`っ！！`い`い`っ……イっ………イ`ギ`たいっ！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

ロビンの宣言を聞き、男は最後の力を振り絞って射精を我慢し強烈なピストンをお見舞いした。

「くあああああああああっ！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

ブチュッ！！`グチュッ！！`ブチュッ！！`グチュ！！

左手でロビンの括れた腰をしっかり掴んで腰を叩きつける。

射精を感じ取り引き締まった膣内と、括約筋に力が入った直腸の吸い付きに負けじと肉棒で執拗にピストンした。

「ん`ん`ん`ん`っ!!!! あ`あ`あ`あ`ああああああああああああ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

そして、ロビンが快感の雄たけびを上げたとほぼ同時に、二本のチンポから精液が噴出される。

ドッピュウウウウ!!! ドピュ!! ドッピュ!!! ドッピュ!! ドッピュ!! ビュルッ!!!
ビュルルッ!!

「あっ……あ`あ`あ`あ`あ`あ`ああああああああああああああああああああ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

子宮と直腸の二か所に極太チンポからの熱々の精液を受け、善がり狂いながら絶頂するロビン。

激しく身体を震えさせ、腰を反り返らせ、確実に外に漏れているほどの大きな声で叫び絶頂した。

その姿は男のチンポを使うというより、男のチンポに使われているメスの姿のようだった。

「うあっ!? あっ!? ああっ……っあっ……ああっ……」

男も二本のチンポからの初めての射精で体力を一気に持っていかれ、ロビンの背中に倒れ込んでしまう。

「はあっ……あっ……ああ……っ♡♡♡♡」

「はあ……はあ……ロビンさん……」

男は意識が朦朧としているロビンの背中にそのまま抱き着いて、ほぼ自分の所有物となったロビンのデカパイを背後から揉みしだきながら、心地よい虚脱感を感じつつ、再び股間の肉棒を大きくさせていった。